

遼寧省博物館藏碑誌精粹

蘇頌題



中國文物出版社・日本中教出版株式會社合作出版

- 顧問 楊仁愷 (國家文物鑒定委員會委員 遼寧省博物館名譽館長 研究員)
- 日文版 監修 片山智士 (日本 福岡教育大學 教授)
- 中文版 監修 王海濱 (日本 毛筆文化博物館 研究員)
- 主編 王綿厚 (遼寧省博物館 館長 研究員)
- 王海萍 (遼寧省博物館 辦公室主任 副研究員)
- 中國責任編輯 莊嘉怡 (文物出版社 編審)
- 日本責任編輯 岸本康宏 (中教出版株式會社 編集顧問)
- 釋文校訂 宋鎮豪 (中國社會科學院歷史研究所 研究員)
- 施安昌 (故宮博物院 研究員)
- 李 穆 (文物出版社 副編審)
- 執筆
- 中國 劉 韞 (遼寧省博物館 館員) 李 燕 (遼寧省博物館 助理館員)
- 于成龍 (遼寧省博物館 館員) 劉亞偉 (遼寧省博物館 助理館員)
- 日本 宮田祐子 (泉中學校 教諭) 大森アユミ (京都高等學校 講師)
- 竹野輝昭 (須惠高等學校 教諭) 堂脇真理子 (大分鶴崎高等學校 教諭)
- 江口孝子 (雙葉學園高等學校 講師)
- 翻譯 太春芝 (広島・中國語講師)
- 江原利津子 (白鵬女子高等學校 教諭)
- 攝影 孫之常 (文物出版社 攝影師) 李振時 (遼寧省博物館 館員)
- 林 力 (遼寧省博物館 館員)

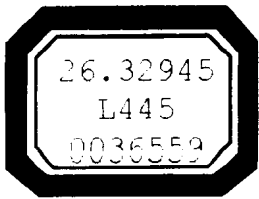
遼寧省博物館藏碑誌精粹

編 著 遼 寧 省 博 物 館
出 版 文 物 出 版 社
中國北京五四大街 29 號
<http://www.wenwu.com>
E-mail: web@wenwu.com
日本中教出版株式會社
日本東京都千代田區神田小川町3-22
印 刷 株式會社 マチダ印刷
日本東京都文京區大塚 5-18-19
發 行 文 物 出 版 社
經 銷 新 華 書 店

2000年1月第一版 2000年1月第一次印刷
ISBN 7-5010-1185-0/J·480 定價: 248 元

2000. 6. 27

考古書店



遼寧省博物館藏碑誌精粹

銘石仁悅署荅



0036559

序 言

中國是世界四大文明古國之一，而文明之主要標識，首先是文字的出現。最早的甲骨文，三代銅器銘文以及兩漢以降的碑誌等，都是古代文字流衍至今的實物資料。爲了研究我國文明史的發展過程，僅根據文獻記載，很難達到全面和翔實，而石刻碑誌則屬於第一手文物資料，可以彌補後期刊行文獻之缺失。所以說，歷代碑誌對於歷史的研究具有無可替代的重要作用。

歷史上對碑誌的研究，起步甚晚。北宋以來，學術界才逐漸形成金石學一科，隨着研究的深入和發展，其重要性日益引起人們的重視，研究成果也更爲顯著。金石學的研究除了直接對歷史史料有補拾缺遺之功外，與中華民族具有優秀傳統的書法藝術，也有着更加密切的關係。書法的發展軌跡——篆籀，銘文，隸書，楷書，行書，這些文字留存下來，除去手書墨跡，主要見于碑誌，兩者互爲依存，其重要程度無軒輊之分。碑誌由于依託于金石，保存時間較之紙、絹更爲久遠，尤爲可貴。

碑誌是衆多歷史文物中的一種門類，具有極其重要的研究價值。收藏碑誌，勿讓其流失荒野，這是各地博物館不可推卸的責任。遼寧省博物館藏碑誌大都是各地出土的墓誌，以北魏時期的居多。此外，內蒙古慶陵出土的遼代耶律氏皇室契丹小字和漢文的哀冊，以及其家族的契丹大字墓誌，極其珍貴，契丹大、小字因無音根，不能釋讀，雖有漢文

中國是世界四大文明發祥國の一つであり、文明の主要基準で最も重要なのは文字の出現である。最も早期に出現した甲骨文、三代の銅器銘文、前後兩漢時代以降の碑文等は全て古代の文字が今まで変遷してきた実物資料である。我が国の文明史の発展過程を研究するためには、文献記載のみでは正しく詳細な事実に到達でき難いが、一方、碑文は直接手に入る文物の資料であり、後世の刊行文献の欠落を補うことができる。したがって、歴代の碑誌は歴史の研究にかけがえない効用がある。

歴史の上から見ると碑文の研究に着手したのは極めて遅い。北宋以来やつと金石学という学問を形成し、研究を深く進めるにしたがって、その重要性は日一日と重視されるようになり、その成果はさらに顕著になった。金石学の研究は歴史を直接補缺するだけでなく、中華民族の優秀な伝統的書法芸術にも、より密接な関係がある。書法の軌跡を見ると、篆籀、銘文、隸書、楷書、行書の順に発展進化し、手書き墨跡を除き、残されているのは、ほとんどが碑文である。両者は互いに依存し、分かち難いものとなっている。金石を材料とし、紙や絹より長く保存がきく碑文の存在は得難く貴いものである。

碑文は歴史文物の中の一品目で、大変重要な研究対象としての価値がある。墓誌を収蔵し、それを野ざらしにするのを防ぐことは、博物館の負うべき責任である。遼寧省博物館に収蔵された碑誌は、ほとんどが各地で出土した墓誌で、北魏時代のものが大多数である。このほか、内モンゴル慶陵で出土した遼代耶律氏皇室契丹小字と漢文の哀冊、及びその家族の契丹大字墓誌は大変貴重である。契丹大・小字は発音の基本が残っていないため、読むことができず、漢文の対照はあるが、契丹皇室のことを知る一部の史料にすぎず、全ての内容を理解することは難しい。近代の国内外の学者たちは、これに対して懸命に研究を重ねているが、全てを理解するまでには至っておらず、当面の文字学研究の大きな課題の一つとなっている。現段階では、国内外の専門家に向けてこの独特の碑文字資料を提供し、言語学者の研究を進め、成果をあげることに期待するしかない。また、少数の満文碑文の考証と解釈を経て、満文文献を参照することができ、後金女真族文学・歴史の研究に大いに益するところがあるはずであ

對照，僅可大致知曉契丹皇室的一段史料，仍難釋悉其全部內容。近代中外學者對之潛心研究，尚不能全面通曉，成爲當代文字學科中的一大難題。目前只能向海內外學者專家提供這份獨有的碑誌文字資料，尚待語言文學家進一步的研析，方奏事功。另外，少數滿文碑誌經釋讀，與滿文檔案可以相互參照，對後金女真民族文史的研究，當有裨益。

此外，碑誌的撰寫人必是經過挑選，具有一定文才的高官名士，而書丹者也是一時著名的書家。因而，歷代碑誌除具有的重要歷史史料價值之外，還具有文學以及書法藝術在內的文化內涵。

遼寧省博物館前身是東北博物館，于一九四九年七月開館，轉瞬間已有五十年的歷史，在這些年里，根據本館的地域特點，除經常在本館布陳東北地區的歷史文物及各種專題展覽，還選擇文物精品在國內和海外舉辦展出。這些展覽，多方面地展示了館藏文化藝術珍品，爲配合宣傳還編印出版了多種畫冊，加大其影響的力度。不僅促進了中外文化的交流，更爲宣傳和弘揚中華民族豐饒悠久的傳統文化作出了不懈的努力。

爲了慶賀建館五十周年，特爲廣大讀者編輯這本《遼寧省博物館藏碑誌精粹》。在館慶前夕，經文物出版社與日本東京中教出版株式會社合作，精印出版。本書收入一百餘件碑誌原拓本，並附有較詳細的說明文字，特別是「概說」一文中，較爲全面地闡述了碑誌的內容及其入藏經過，可資參考研究。中日雙方合作爲這件極有意義的工作，付出了辛勤的勞動，收穫匪淺，此項成果將對國內外學術研究，尤其是對遼金及女真民族文化史的研究必產生一定的影響。

文短情長，書不盡意，諸希諒察是幸！

楊 仁愷 拜撰

一九九八年十一月二日于盛京沐雨樓

る。

碑文を書く者は選拔され、ある程度の文才がある高官名士でなければならぬ。そして歴代の墓誌や碑文を書く者にいたっては、その時代の著名な書家であればならない。碑文そのものは、重要な歴史資料の価値があるほかに、文学及び高い書法芸術を含む文化を内包している。

遼寧省博物館の前身は東北博物館で、一九四九年七月に開館し、あつという間に五十年が経った。この五十年の中で本館は地域の特徴により、常に東北地区の歴史文物や特定のテーマの展示を行い、また、宣伝のため国内外に巡回展示をしてきた。これらの展示は、多方面にわたって優れた収蔵の文化・芸術品を宣揚した。また、国内と海外の文化の交流を促進しただけでなく、さらに中華民族の豊饒悠久の伝統的な文化に弛まぬ努力をしてきた。さらに画集を編集・出版し、これにより影響力を高めてきた。

本館の創立五十周年を祝うため、その記念会の前に、文物出版社と日本東京中教出版株式會社との協力を得て、特別にこの「遼寧省博物館藏碑誌精粹」を編集・出版した。本書は百余りの詳細な説明つきの碑文原拓本を載せ、特に「概説」部分で碑文の内容と入蔵の経緯を詳しく解説しているため、参考になるものと確信する。日中双方ともに、この実用的な作業に多くの努力をし、豊富な成果を得、国際的學術研究上に、さらに遼金女真民族文化史の研究にも大きな影響を及ぼすことだろう。

短い文で意を充分表すことができないが、皆さまにご理解いただければ幸いです。

楊 仁愷

一九九八年十一月二日 盛京沐雨樓にて

目次

序言……………楊仁愷 3

館藏碑誌精粹序……………羅繼祖 8

寄語日中合作出版……………片山智士 9

訪遼寧省博物館……………片山智士 11

遼寧省博物館藏碑誌精粹概說……………王綿厚／王海萍 16

遼寧省博物館藏碑誌精粹

一 袁敞碑……………38

二 熹平石經……………40

三 三體石經……………42

四 卬丘儉紀功碑……………44

五 劉賢墓誌……………46

六 顯祖嬪侯夫人墓誌……………48

七 元勰墓誌……………50

八 周千墓誌……………52

九 元侔墓誌……………54

一〇 高宗文成皇帝嬪耿氏墓誌……………56

王誦妻元氏墓誌……………58

一一 元祐墓誌……………60

一二 世宗嬪司馬顯姿墓誌……………62

一三 元勰妃李媛華墓誌……………64

一四 元纂墓誌……………66

一五 元壽安墓誌……………68

一六 高廣墓誌……………70

一七 元悌墓誌……………72

一八 元略墓誌……………74

一九 元欽墓誌……………76

二〇 元景略妻蘭夫人墓誌……………78

二一 元誨墓誌……………80

二二 元徽墓誌……………82

二三 元文墓誌……………84

二四 元鑽遠墓誌……………86

二五 元玕墓誌……………88

二六 華山王妃公孫氏墓誌……………90

二七 張滿墓誌……………92

二八 元鷲墓誌……………94

二九 侯海墓誌……………96

三〇 元融妃盧貴蘭墓誌……………98

三一 元延明妃馮氏墓誌……………100

三二 蕭正表墓誌……………102

三三 高建墓誌……………104

三四 高洵墓誌……………106

三六	梁伽耶墓誌……………	108
三七	樂陵王妃斛律氏墓誌……………	110
三八	高百年墓誌……………	112
三九	高建之妻王氏墓誌……………	114
四〇	寇胤哲墓誌……………	116
四一	楊居墓誌……………	118
四二	張僧殷墓誌……………	120
四三	段模墓誌……………	122
四四	韓暨墓誌……………	124
四五	唐該墓誌……………	128
四六	楊厲墓誌……………	130
四七	左才墓誌……………	132
四八	楊藝墓誌……………	134
四九	張秀墓誌……………	136
五〇	盧承業墓誌……………	138
五一	盧君夫人李灌頂墓誌……………	140
五二	孫默墓誌……………	142
五三	王緒母郭氏墓誌……………	144
五四	張矩墓誌……………	146
五五	盧玠墓誌……………	148
五六	崔孝昌墓誌……………	150
五七	李戢墓誌……………	152
五八	高守墓誌……………	154
五九	嗣曹王妃鄭中墓誌……………	156

六〇	韓貞墓誌……………	158
六一	葦塤夫人溫瑗連墓誌……………	160
六二	陳萬墓誌……………	162
六三	劉繼文墓誌……………	164
六四	張正嵩墓誌……………	166
六五	耶律延寧墓誌……………	168
六六	王鄰墓誌……………	170
六七	王說墓誌……………	172
六八	宋匡世墓誌……………	174
六九	聖宗耶律隆緒哀冊……………	176
七〇	張哥墓誌……………	178
七一	晉國夫人墓誌……………	180
七二	張思忠墓誌……………	182
七三	蕭相公墓誌……………	184
七四	聖宗欽愛皇后哀冊……………	186
七五	耶律庶幾墓誌……………	188
七六	耶律仁先墓誌……………	190
七七	聖宗仁德皇后哀冊……………	192
七八	蕭袍魯墓誌……………	194
七九	鄭恪墓誌……………	196
八〇	耶律慶嗣墓誌……………	198
八一	賈師訓墓誌……………	200
八二	道宗宣懿皇后哀冊……………	202
八三	道宗宣懿皇后契丹文哀冊……………	204

八四	道宗皇帝哀冊……………	206
八五	道宗皇帝契丹文哀冊……………	208
八六	梁援墓誌……………	210
八七	梁援妻張氏墓誌……………	213
八八	吳舜闢墓誌……………	216
八九	奴哥馬郎君墓碣……………	218
九〇	大昊天寺妙行大師行狀碑……………	219
九一	決定頌石碣……………	222
九二	王宜人黃氏墓誌……………	224
九三	崔源墓券……………	226
九四	崔源墓誌……………	228
九五	王瑄墓誌……………	230
九六	李英母陳氏墓誌……………	232
九七	金大姐墓誌……………	234
九八	孫夫人項氏墓誌……………	236
九九	宋國忠墓誌……………	238
一〇〇	重修鎮邊寺殘碑……………	240
一〇一	盛京鐘樓碑……………	242
一〇二	溫莊長公主壙誌……………	243
一〇三	達海碑……………	244
一〇四	馬鳴佩墓誌……………	246
一〇五	馬雄鎮暨夫人李氏合葬墓誌……………	248
一〇六	馬世濟夫人董氏墓誌……………	250
一〇七	馬世濟暨夫人董氏連氏合葬墓誌……………	252

一〇八	馬國楨暨夫人程氏合葬墓誌……………	254
一〇九	磁縣新出魏齊墓誌本末記……………	256

未掲載釋文…………… 258

遼寧博物館藏墓誌精粹一覽…………… 300

館藏碑誌精粹序

今年十二月、老友楊仁愷同志以書來、囑爲遼寧省博物館輯印之館藏碑誌精粹作序、書語過簡、予莫測所以、無從着筆、況在病中。越數日郵「題綱」至、則粲然大備、乃援筆曰、「此事于吾家三世有關、不得不爲一言」。

先祖雪堂公好蓄碑刻、嘗歆廣輯傳世金石文字爲一編、造端廣袤、志弗克逮、乃分地爲之、即《芒洛諸冢墓遺文》是也、金文甲骨別自成編。然已及身未竟。晚年購致元魏誌銘數十品、後以贈偽滿瀋陽博物館、即今遼博之前身、今俱見書中。而所撰魏誌之跋尾、又多見于居遼諸集中。此一應紀也。先人寓遼後始蒐求東土碑刻、所得綦繁、于是先叔梓溪公藉以成《滿州金石志》。此一應紀也。遼人哀冊碑誌、傳世甚晚、小子不敏、嘗有事于此、如遼陵書法、遼人諸誌、亦曾染筆。此三應紀也。今老朽無成、言之滋愧。

又我解放初期、亦嘗執役于遼館、與仁愷爲同事、今白頭相對、惟此公耳、他人已矣。猶憶每過遼館後院、輒見豐碑矗立、意今編中所載、半即此物。四十餘年夢影猶縈腦際、未嘗忘也。而以吾家舊藏東漢袁敞碑爲之冠焉。又念曩昔燕京郊外兩人躑躅之盛揚《雪雁尋碑》之韻事、今料已入貯北京石刻博物館。與此書先後輝映、並稱藝林勝事。而見綿厚、海萍兩君之論證、又知後起之有人、吾又不禁躍然稱慰也夫！

歲在戊寅十二月十三日 八六十不全

老人羅繼祖序。

今年の十二月、老友の楊仁愷同志から手紙があつて、遼寧省博物館より館藏碑誌精粹という本の編集、出版をするため、序文の作成を依頼されたが、その手紙が簡略に過ぎ、私にはよく理解できなくて、返事をしたくてもどう書けばよいのか分からず、その上に病氣もしていたという事情もあった。それから数日後、その本に関する「大綱」が届いて、明瞭に理解できた。そこで筆をとつて曰く「これは我が家の三代代が関わっていることなので、一言言わなくては行かない」と。

祖父の雪堂公(1)は、碑刻を蓄えることが好きで、かつて範圍が広くて昔から伝わつてきた金石文字を収集して一編にまとめようとしたが、その端緒は余りにも広範圍過ぎて、志は実現できなかった。地域を分けてまとめたのが、即ち「芒洛諸冢墓遺文」であり、金文甲骨は別冊にした。しかし、在世中にはその願望が実現できなかった。晩年には元魏の誌銘數十基を購入し、後にそれらを偽滿州国の瀋陽博物館、即ち現在の遼寧省博物館に寄贈した。すべてはこの度の本に載せられている。著述された魏誌についての跋文も、ほとんど居遼諸集に登載されている。このことは第一に書かなければならない。先人が遼に寓居してから東土にある碑刻を探し始め、得るところが非常に多かつた。それで亡き叔父の梓溪公(2)は、それらを「滿州金石志」という本に編集した。これは第二に書かなければならない。遼の時代の哀冊と墓誌は、現在に伝えられたのが極めて遅く、私は賢くはないが、かつてこれらの研究に専念し、例えば遼陵の書道、遼人の諸墓誌に筆を染めたこともあった。これは第三に書かなければならない。今の私は老いて、実績もなく、そういうことを言うのも恥かしい。

さて、解放(一九四九年十月新中国ができたことを指す)初期に私も、かつて遼(寧省博物館)館において仕事をしたことがあり、仁愷と同僚だったが、今、白髪頭で向かい合っているのは、ただこの人だけで、他の人たちは既に亡くなったのであろう。更に思い起こせば、毎回遼館の裏庭を通つたとき、よく見かけたのは、いつもそれらの大きな碑石が聳え立っていたことである。今編集中の本に載せているものの半分は、恐らくそれらのことだと思う。四十年間、夢に出た碑影はまだ頭に残っており、忘れたことがない。ところで、我が家が所蔵していた後漢の袁敞碑は、それらの中でも冠たるものであろう。また、昔、二人が燕京(北京の古称)の郊外で散策し「雪雁尋碑」を盛んに賞揚したロマンチックなことも懐かしく思い出す。今は、恐らく北京の石刻博物館に収蔵されていることと思う。この本と負けず劣らず光輝き、両方とも芸苑の立派な事物として称えられるであらう。その上に、綿厚と海萍両君の論證を読むと、後を継ぐ人材もいることが分かり、私はまた、私の胸が高鳴り、心が慰められる想いを禁じ得ない。

戊寅(一九四八年)十二月十三日、歳が八十六になろうとしている老人の羅繼祖序。

(1) 羅振玉 (2) 羅福頤

寄語日中合作出版

此次，日中合作出版遼寧省博物館所藏多達百餘幅尚未發表的碑誌，我感到衷心的喜悅。這些珍貴的資料，展現了西漢至中華民國時期的演變過程，過去雖曾被一些專家識解，但至今大都尚未公諸于世，難為一般人所知曉。這就是我知情後，勢必致力於將這些珍貴的石刻古文資料編印成書出版，使其價值周知于衆的原因。

那是六年前（即一九九四年）訪問該館之際，當我們有幸能够直接鑒賞唐代弘文館所裝勾填本王羲之一門書翰《姨母帖》、《初月帖》及魏人書《孝女曹娥碑》、唐歐陽詢《仲尼夢奠帖》、唐張旭《古詩四帖》等國寶級文物精華的時候，大家都沉浸于感動和興奮中。之後，我們又被引到另一間碑刻陳列室，更爲那里度藏的石刻精華其品質之高、數量之多而驚歎不已。

一定要使該出版計劃成爲現實的想法即源于此，同時也是使我全力以赴、執著地完成如下心願的理由。

第一、使這些資料得以公開發表，令其爲各有關科研領域得以採用。
第二、歷來書法史上碑誌石刻之名品，傳拓過多，幾至喪卻了原有的光彩。爲今後不再重蹈覆轍，將其拍成精美的照片，印出準確無誤的圖書，以實現保存原碑風貌的強烈願望。

第三、將現有文物資料的全貌明確地拍攝和記錄下來，爲避免將來

日中共同出版によせて

今回、遼寧省博物館収蔵の百面余りに及ぶ、未発表の墓誌について、日中共同で出版できたことは誠に喜ばしいことである。これ程多くの、しかも前漢代から中華民國までの文字資料が、一部の専門家の間では以前から知られてはいたが、未だ一般には広まっていけないと聞き、是非ともその真価をより多くの人々に、知ってもらいたく、発刊に努力してきたわけである。

思い起こせば、今から六年前（一九九四年八月）に当館を訪れた際に、当館収蔵の国寶級文物精華、唐代弘文館装鈎填墨本王羲之一門書簡《姨母帖》・初月帖、晋人書《孝女曹娥碑》、唐歐陽詢《仲尼夢奠帖》、唐張旭《古詩四帖》などを直接目の前で鑑賞する機会を得て、皆感激と緊張に包まれたのであるが、さらに別棟の碑刻陳列室に案内され、改めてその質の高さと、量の多さに驚かされたのである。

この企画を是非とも現実のものにしたく思うようになったのは、そうした経緯があったのである。従って、私にとりまして以下のような強い願いを込めて取り組んできたわけである。

第一は何と言っても先に述べたように、これだけの資料が公表されることにより、様々な領域で活用されることを願うことである。

第二は従来より書道史上で有名であるものには、とかく拓本を取り過ぎて、その本来の生彩を失っているものを多く見てきた。今後は、そうならないために、精密な写真撮りをして、正確な本を出すことにより、原碑を守りたいという強い願いがあつてのことである。

第三は現時点での資料の全貌を明確にしておくことにより、今後の混乱を無

資料之混亂。

第四、登載介紹和研究墓誌的論文，謀求各有關學科研究人員對其的釋讀、探索和研究。

第五、書法樂趣，在于表現樂趣和鑒賞樂趣，此次出版計劃則是以兼顧于這兩方面而爲之的。我尤爲關注的是，忠實地記錄這些與悠久歷史相關的文字資料和對各墓誌史料的解說、碑銘文字的釋讀、及對其書法藝術的鑒賞，使更爲廣泛的讀者易于理解和欣賞。

衷心期待如上的心願能得到讀者們的理解和接受，并使我們爲之努力的成果得以廣泛應用。

日本國 福岡教育大学教授 片山智士

一九九八年十二月二十日

くしたいためである。

第四は墓誌についての学術論文をのせて、様々な領域への理解を広めたいためである。

第五は書道の楽しみには、表現する楽しみと鑑賞する楽しみがあるが、今回の企画ではその両面に寄与できることを願って企画したわけである。長い歴史に連なる文字資料について、個々の碑の釈文、概要、書の鑑賞を記して、読者に理解されやすいように配慮したつもりである。

以上のような企画に対する願いを読者の皆様にご理解いただき、広く活用されることを祈ってやまない。

日本国 福岡教育大学教授 片山智士

一九九八年十二月二十日

訪遼寧省博物館

遼寧省博物館、原名東北博物館、與北京故宮博物院、上海博物館一樣、是廣收歷史、藝術等文物的中國著名博物館之一。一九四九年七月七日正式開館、今年當迎其五十週年記念。此次中教出版社（日本）與文物出版社（中國）以合作出版的形式、編印大型圖書《遼寧省博物館藏碑誌精粹》、可謂適時恰當。而且該館將於四、五年後、移館址至瀋陽市中心、以現代化博物館的新姿再現。屆時、我期待蒞臨該館參觀的人們、能去欣賞這些超逾百面的碑誌。

在此、利用少許的版面、筆者就所見、向讀者們介紹一下遼寧省博物館的碑刻陳列室。以爲閱讀後面的學術論文、概說、釋文、欣賞精美的拓片影本和書法鑒賞等作導引、豈不更覺親近。而且鑒于上述的遷館計劃、現在的記述也當屬至爲重要。

筆者訪問該館計四次、三次在夏天、一次在冬季、情景各異。這裏尤其想記述的是一九九八年九月、爲落實出版計劃而從事考查測量原碑原拓、拍攝拓片、商榷兩方編輯的責任分擔等項目而進行的訪問。

遼寧省博物館位于普通商業區的一角。館舍前、槐樹遮擋着夏日的強光輻射、樹冠低垂覆蓋着人行道。喧嘩的聲音和晴朗的天氣交織一起、使我的腦海浮現出往昔的難忘情景。進入敞開的大門、隔着寬闊的庭院、

遼寧省博物館を訪ねて

遼寧省博物館は元の名前を東北博物館と言い、北京故宮博物院、上海博物館と同様、歴史分野、芸術分野など幅広く文物を収蔵している中国を代表する博物館の一つである。すでに一九四九年七月七日に正式に開館されているので、今年は五十周年を迎える記念すべき年である。今回の中教出版社（日本）と文物出版社（中国）による共同出版という形による、『遼寧省博物館藏墓誌精粹』発刊は、まさに時を得た企画になったわけである。さらに近い将来（四、五年先か）瀋陽市内の中心地に移転し、近代的博物館として新しく生まれ変わる計画があるとのことである。従ってそれからは、当館を訪れる人は、百面を遥かに越える碑誌を鑑賞できるようになることと期待されている。

ここでは少し紙面を頂き、読者の皆さんに、今回対象としている遼寧省博物館（碑刻陳列室）について、筆者の目を通して紹介してみようと思う。それは後の学術論文・精密写真による拓本陰影・釈文・概説・書の鑑賞などに入る前に、予備知識として読んで頂ければ、より身近に感じるのはないかと思つてのことである。それから上記の移転計画があることから、現在を記録しておくことも大切なことと考えたからである。

筆者が当館を訪れたのは計四回であるが、夏が三回、冬が一回、そのいずれもがその時その時の風情を漂わせていた。特に今回の企画に必要な、原碑の実測、拓本の写真撮り、両国の役割分担などで訪れた時（一九九八年九月）のことを中心に述べてみようと思う。

遼寧省博物館はごく普通の商業地区の一角に位置している。当館の前には槐



遼寧省博物館正門
遼寧省博物館入り口



館前の街道及排列整齊的槐樹
館前の通りと槐並木

正面は北展覽樓，左邊は西展覽樓，碑刻陳列室位于右側。透過院中茂盛的花木，觀衆和該館工作人員的身影隱約可見，這寬敞靜謐的空間也許是該館的特點吧。幾次來訪，我都會產生一種沈浸其中的慰藉感。這實在是個極美好的空間。一般來館的觀衆通常是進入左側的西展覽樓，參觀歷史文物的基本陳列，以及不定期的臨時展覽。

庭院的一角，迎着夏日的陽光，記得那里有結出果實的山楂樹，果子酸而未熟。這種樹，春天開白花。可以想像出春天時，滿樹綻開的白花與庭院中各種鮮花爛漫爭艷的優美景色。西展覽樓的對面，就是碑刻陳列室，即展出着本書的研究對象。

碑刻陳列室爲平房，南北橫長。入口處兩米左右，木質的雙扇門，其上掛有隸書的「石刻陳列室」木刻匾額，字跡蒼潤。進門左手爲展覽的起始，先是前言，然後是按時代順序編號陳列着各種形制的碑誌。起初會因室內

（えんじゅ）の木の街路樹が夏の暑い陽射しを遮り、歩道に木陰を落とし、喧騒とのどかさの入り混じった懐かしい雰囲気が漂っている。大きく開かれた正面の門から中へ入ると、広い中庭を隔てて、正面に北展覽樓、左に西展覽樓、右に碑刻陳列室と位置している。一般參觀者の姿、当館の職員の姿は見られるものの、やはり当館のもっている個性なのか、そこにはゆったりとした静かな空間がある。いつ来ても、この空間に包まれると心が休まる思いがする。実に素晴らしい空間である。一般の来館者は左側に位置する西展覽樓に入り、歴史の流れを示す文物の常設展や、その時その時の企画展を観て帰るのが通常のコースのようである。

中庭の片隅には真夏の陽射しを受けて、実をつけた山楂子（さんざし）があったことが記憶に残っている。その実は、いまだ熟してなく酸っぱい味がした。この木は春に、白色の花をつけるので、この中庭も様々な花々の咲き乱れる華麗な空間になることだろうと思われる。その中庭を隔てて西展覽樓と対する位



從繁花盛開的庭園望去的北展覽樓
花盛りの中庭より正面の北展覽樓を望む



傾聽楊仁愷先生講述墓誌的筆者
楊先生より墓誌銘の説明を受ける筆者

照明的黯淡而令人難以辨視，一經適應，觀者將會被嵌入牆壁的一面面端肅靜穆的墓誌銘所吸引。爲使字跡易于辨認，碑表貼有宣紙的拓片。這種處理雖難辨碑版的石質，卻宜于鑒賞文字。古起西漢元初四年的碑，到中華民國年間的墓誌，數量多達一百二十五面，是極其珍貴的資料寶庫。參觀中，一面依循着歷代碑誌的演變，瀏覽着碑刻的大小、位置、排列的不同，一面體會着字體變遷和書風之異，同時欣賞着漢字、滿文及契丹文等各種文體，尤其是那些北魏和唐代石刻絕品的藝術魅力，都給人以美的享受，使人時而留連駐步，以至忘卻了時間。

展覽的後半部，其形式更加壯觀堂皇，陳列方式上明確地分成墓誌銘本文和墓蓋兩體，令人易解。本書中讀者通過照片雖也可窺其大小，但參觀時近觀則更會爲其雄大的氣派而感染。

置に、今回の研究の対象としている碑刻陳列室がある。

碑刻陳列室は平屋で、南北に非常に長い展示室である。入口は二メートルほどで、木製の開き戸になっていて、その上には「石刻陳列室」と暖かみのある隸書体で木彫の額が掛けられている。入ってすぐ左側へ進むように展示されていて、先ず説明文、それから図面の数字（碑誌の固有番号）に従って、時代の古い物から順に鑑賞できるように配列されている。最初は少し照明が暗くて見にくいのが、慣れてくると壁面に埋め込まれた、それら墓誌銘の数々は荘厳で静寂で、見る人を魅了して自ずと立ち止まらせる力を持っている。碑面には画仙紙による拓本が直接張りつけられていて文字が見やすいように配慮されている。このような処置は碑面の材質や状態についてはわかりづらいが、文字そのものについては、鑑賞しやすいようになっている。古くは前漢元初四年の碑から中華民國年間の墓誌まで、その数一二五面にも及ぶ貴重な資料の宝庫である。

在此，我衷心地期望讀者們能親赴遼寧省博物館參觀，以彌補上述說明之不足。另附碑刻陳列室內的位置分布圖和碑誌的出土示意圖（遼寧省博物館提供），以備參考之用。

以上，我以一個日本筆者的身份，勉為其難地記述了遼寧省博物館的外觀和部分陳列情況，作為閱讀本書正文和進行碑刻墓誌專業性研究的預備知識。當然，求得歷史上文字資料的正確性是必要的，但是了解這些東西在哪里、被如何保管着、又是怎樣流傳至今的等等情況，不是也可以加深對這些資料的理解。這就是我從日本人的角度來書寫此文的緣故，如稍有幫助是以為幸。

日本國 福岡教育大学教授 片山智士



參與出版本書的日中雙方有關人員
今回本書の出版に携わった日中関係スタッフ

時代の流れに従い見て回ると、碑刻の大小、配置・配列の違い、書体の変遷、書風の違い、漢字・滿州文字・契丹文字など時を忘れて、しばしその場に立ち止まることも度々である。特に北魏、唐代の物の中には、従来から有名になっている墓誌銘に決して劣ることのない質の高い物も含まれていて、見る者を魅了する力を持っている。

さらに進んで後半の展示には、特に形式も立派で、文字も明確な墓誌銘がその本文と蓋とが対で見る事ができるよう工夫がされていて、見る者にとっては有り難い限りである。写真からもその大きさは分かって頂けるのではないかなと思うが、そばで見ているとその雰囲気は圧倒される偉大さがある。

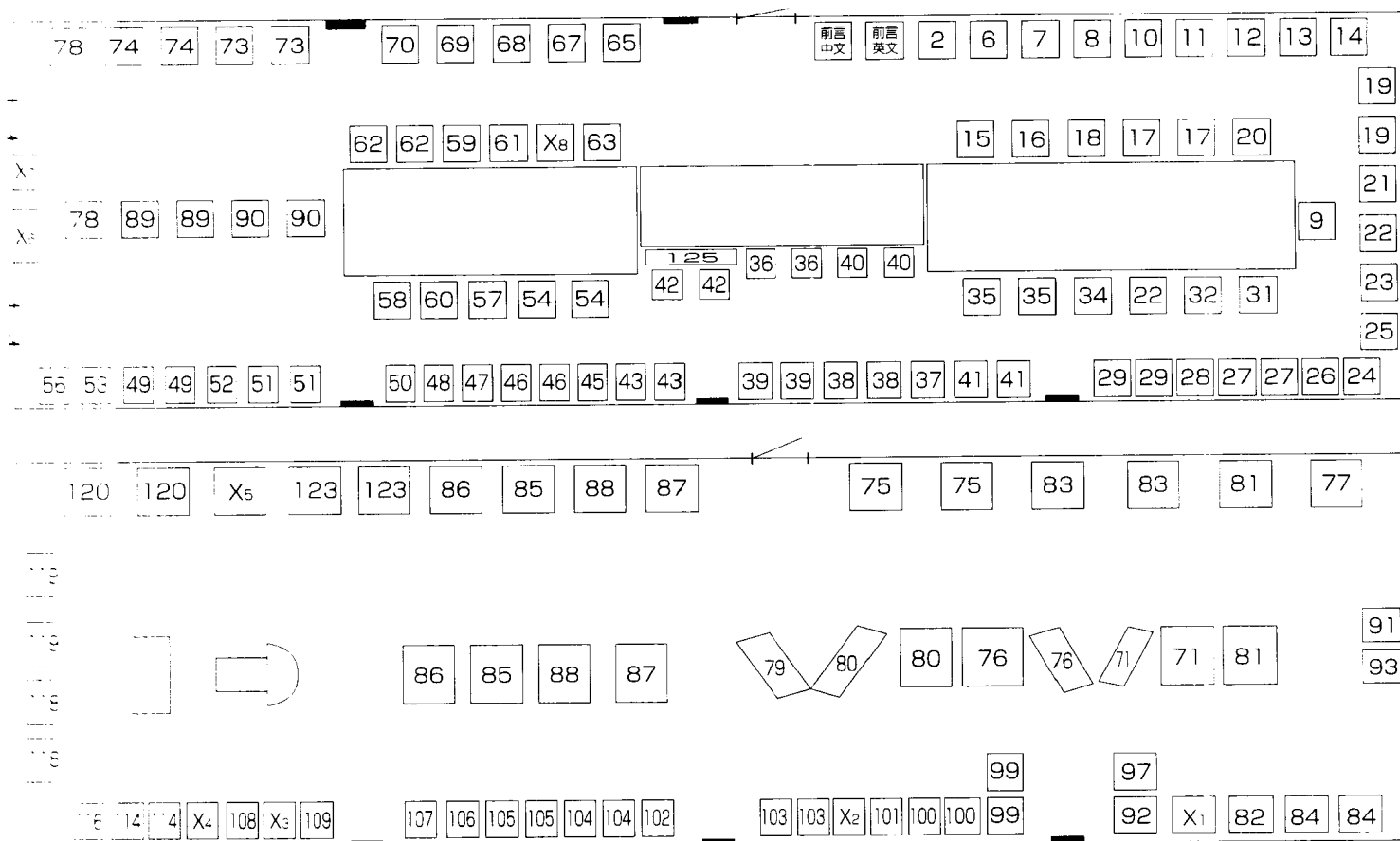
紙面の都合でまだまだ説明不足は否めないが、そこは読者の皆さんが直接、遼寧省博物館に赴いて補って頂くことを願ってやまない。参考までに、碑刻陳列室の内部の配置図と碑誌出土地の図（遼寧省博物館提供）を添えておくので活用して頂きたい。

ここまで敢えて、日本人の筆者が遼寧省博物館について述べてきた。それは本研究の対象としている碑刻墓誌の専門分野についての本書の本文に移る前に、予備知識にして頂ければとの思いがあつてのことである。歴史上の文字資料については、正確な資料が求められるのは当然であるが、ただそれだけでなく、それがどのような所に、どのようにに保管され、どのようにに現在まで維持されてきたのかなど、直接資料の理解を補完するものもあるのではないかと思ひ、敢えて日本側からの目で書かせて頂いたわけである。少しでもお役に立てれば幸いである。

日本國 福岡教育大学教授 片山智士

碑誌陳列配置圖

(遼寧省博物館提供)



遼寧省博物館藏碑誌出土地點示意圖

(遼寧省博物館提供)

